ONEPIECE~白髪の男~

すねぇく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＯＮＥＰＩＥＣＥ～ 白髪の男～

【Ｎコード】
Ｎ８８８３Ｚ

【作者名】
すねぇく

【あらすじ】
空き缶を踏んで転び、不良に追いかけられ、トラックに撥ねられ・・・
死んだ俺は胡散臭い髭オヤジの目の前にいた
よく分からないままＯＮＥＰＩＥＣＥの世界に飛ばされて・・・
なんだかんだで海に出ました

序章

真っ白
そう、俺の目の前に広がるのは都会のコンクリートジャングルじゃないといけないはずだった
だが、俺が目を覚ますと目の前に広がるのは真っ白な何もない空間
有り得ない、ちょっと待て
俺は確かただの高校生だったはずだ、昨日だって空き缶をふんずけてこけて、何かぶつかった感触がしたと思ったら目の前には強面の不良さんがいて、相手が1人だから余裕こいてたら何処からともなく不良が出てきて、逃走を開始、前を見るのを忘れていたので当然信号が赤になったことなど分かるわけもなく、大型トラックに跳ね飛ばされ意識を失うといった、異常(ただ)の高校生
・・・あれ、俺死んでない？
死んでるよね、流石に大型トラックに跳ね飛ばされたら確実に死ぬ
流石にってのは気にすんな、俺は少しタフだったってことだ
だとしたらここはどこだ？俺が死んだんならきっと天国に連れて行かれるはずなんだが
まあよくある話だと俺の目の前に胡散臭い髭親父が出てきて「わしは神じゃ」とか言うんだろうなー
直後
俺の目の前に胡散臭い髭親父が出てきて
「わしは神じゃ」
とか言いやがった
「・・・うわぁ」
うわぁ、
まさにうわぁである
そうだ、きっと夢なんだ、ほら、もう少しで消毒液の香りがする病室のベッドの上にいるに違いない

「うわぁってなんじゃ、わしは神、お前人間、ＯＫ？」
「俺人間、お前変態、ＯＫ？」
「生まれてこの方神様に変態などと言った輩は初めて見た」
「それはそうと神様、ここってどこよ？俺どうなんの？」
「マイペースな奴じゃな、えーっと簡単に言うと」
自称神様はスゥ、と息を吸って
「転生」
「おっしゃー、じゃあさっさとしろ」
「あれ？驚いて？もっと驚いて？わしはお前が不幸すぎてあまりにも不憫だから転生させてやろうって言うのに」
うっせばーか、これは夢なんだ、だとしたらこんな馬鹿らしい夢なんか見てられっか
あれ？これが俺の夢だとしたらこの夢を作り出している俺は馬鹿ってことだよね？
・・・まあ、いい
「いやどうでもいいからさっさとしろ髭オヤジ、いい加減怒りますわよ」
「落ちろ」
自称神様がそう言った瞬間
俺の目の前が真っ暗になった
なんだよ、真っ白になったり真っ暗になったり
まあいいか、これで夢が覚めて現実世界に帰れるんだから・・・
そのまま俺の意識は闇へと落ちていった

第1話　無人島

「・・・ハッ！！」
目を覚ました
俺の予想していたものは、消毒液の香りと、白い天井
だが実際は違った
俺は仰向けに倒れていて、目に映るのは青い空、肌に感じるのは草の感触
近くで水の流れる音が聞こえる
そうだ、まるで自然の中に放りだされたような・・・
これが転生というやつだとしたら、もし本当に転生だとしたら
神様は俺をここに放り出したことになる
一つ言わせてもらおう
ふざけんなチクショウ
『目を覚ましたようじゃな』
忌々しいクソオヤジの声
『手短に言うぞ、お前は今ＯＮＥＰＩＥＣＥの世界にいる。そんでお前の近くに悪魔の実があるからそれを食え、名前はムキムキの実で、この世の向き・・・お前にはベクトルと言った方が早いかの、それを操れる。それとわしの情けで３歳にしておいた、感謝せい。んじゃ』
軽い、軽すぎる
神様がんじゃ、とか言ってこんな自然に３歳の子供を放置するなんて想像できるだろうか
少なくとも俺は今体験するまで想像できなかった
それとここがＯＮＥＰＩＥＣＥの世界だとかそういうのはもういい
吹っ切れた
そういえば神様はムキムキの実があるとか言ってたな
能力がまんま一方通行、最強であり、最凶である

最初ムキムキの実と聞いた時は体に筋肉が凄くついて、ムキムキになるかと思った
そうだとしたら俺は神様を一生恨む事になっただろう
ひとまず立ち上がるか・・・っと
上半身を起こして立ち上がろうとすると
コツン、と
「いてっ！！」
額になにかぶつかった
痛む額を押さえながらもぶつかった対象を見ると
何か毒々しい実があった
この時、俺は瞬時に理解した
これは悪魔の実だ、と
確か悪魔の実はこの世の終わりを感じるほど不味かったはずだ、それを進んで口にしようとは思わない
・・・ふむ
俺は悪魔の実を手にとって、水場に移動する
さらば、俺の味覚よ、しばし旅に出てもらおう
「いざ！！」
一口
もぐもぐもぐもぐ・・・ゴクン
うん
「死ぬ」
それだけ言って俺は水を飲みまくった
なにこれ！？食うもんじゃねぇよ！！こんな不味いモン食ったことねぇ！！
「ぷはぁっ！」
そのまま後ろに倒れこむ
ま、まあ、これで俺は悪魔の実の能力者になったはずだ、それもこの世のベクトルを操る能力を
扱いは難しいだろうが、この数年でなれていけばいい

・・・今思った
食料は？
見たところここは無人島なみたいだし、食べ物はどうすればいいんだろう
ガサッと
突然草むらの方から音がなった
「まさかここで虎とかなんか出てきて、俺が襲われるなんてパターンにはならないだろうな」
わざと口に出して言ってみる
瞬間
立派な爪と牙を持った虎が襲い掛かってきた
「まじかよっ！？」
突然のことなので目をふさいでしまう
さらば、俺の第二人生、１時間もせずに終わってしまったよ・・・
きっともうすぐ目の前は赤い血で染まるに違いない
・・・あれ？
全然痛くない
恐る恐る目を開けてみると、目の前には牙と爪の折れた虎がいた
・・・ああ
反射ね
どうやら俺もデフォルトで反射設定が働いてるみたいだ
だったら
「てい」
虎に一発ぶち込む
顎に俺の拳が突き刺さり、軽く数m吹っ飛ぶ
わけもなく、運動量のベクトルを虎に向けただけで、３歳程度の腕力ではそうも吹っ飛ばない
ただ、俺の反射膜に触れて折れた牙と爪、あと残ってるのはぷにぷにの肉球と大きな体
・・・ふむこいつ

食えるだろうか？
「いやいやいや！！ダメだ！！魚とかは全然ＯＫだけど流石に虎はダメ！！無理だよ！！」
などと俺が１人（といってもすぐそばに一匹いるが）で叫んでいるとズブッ、という音がした
思わず虎の方を見るとさっき折れた牙と爪が元通りになっているではないか
何だこの虎、よく見たら毛白いし
てか再生早すぎじゃね！？絶対普通じゃない！！
「全く、触れようとしたら牙と爪が折れるなんて何てチートよ？」
「は？」
なにやら
目の前にいる白い虎さんが人語を話している
それもその姿に似合わない高い女みたいな声で
・・・ハハッ、有り得ない、虎が喋るなんて有り得るわけがない
そうだ、んなこと有り得ねぇ
・・・いや、この世界なら有り得るか？
悪魔の実、そうだ悪魔の実がある
ヒトヒトの実をこの虎が食った、ってことか？
だとしたら無駄な再生機能はどういうこと？デフォなの？
俺が下に向けている視線を再び虎に向けると
そこには、白い肌で、金髪、金色の瞳の３歳ぐらいの女の子がいた
・・・あーそうか
悪魔の実を食ったのは間違いない、だが虎が人の言葉を喋れるようになったんじゃなくて、人が虎になれるようになったんだ
はっはっは、そういうことか
ひとまず、この状況をどうにかしなければ
勘のいい方はお分かりだろう、そうだ、さっき俺が目にした虎は服なんて着てなかった
そこから人の姿に戻れば、どうなる？

答えは一つ
そう、俺の目の前にいる彼女はこの場では表現してはいけない姿なのだ
率直にいいますと、素っ裸である
でも俺は精神年齢高校生、幼女の裸なんざ見て興奮なんかするわけがない
だが、どういうことか体温が上がっていく感じがする
辿り着く答えは二つ、俺の心は3歳に戻ってしまったか、もう一つは俺にロリコンの気があるか
「いっやぁあああ！！！？それはねぇ！！てかなんて格好してんだお前！？」
「んー？別に気にすることないじゃん？」
「何で！？最近の子って何でこんなに大胆なの！？いやもうこれは大胆の域を越してる！いいから取り敢えず服を着なさい！！」
「何でそんな慌ててるの？いいじゃない、同じ女の子なんだし」
「・・・へ？」
今、なんつったこいつ？
俺が女の子？有り得ない、だって下半身にしっかり前世で慣れ親しんだモノがあるし、俺は男だ
だとしたら・・・
俺は水場まで弾丸のような速度で走っていった、てか飛んだ
そして水面に自分を映し、顔を確認する
・・・ああ、無理ねぇわ
だって女みてぇな顔してんもん
髪と肌は白くて、瞳は黒く、少し大きな目、整った顔立ち
いやさ、幼かったら女の子と見間違える事はあると思う、仕方ないけどそんな事関係なしに百人に聞いて百人が「女の子」と答えるほど俺は可愛かった
自分で言うのも気持ち悪いが、許してほしい
「・・・マジ？」

「ちょっとー何もの凄い速さで逃げてんの？」
「えーっと・・・大変申し上げにくいのでありますが・・・」
もういい、本当のことを告げよう
「俺は、男」
「・・・え？」
「何なら今ここで下半身晒してもいいんだぜ？」
俺がセクハラギリギリ（っていうかセクハラ）の発言をすると
彼女の顔が驚愕の色から、段々と赤くなっていって、最終的にリンゴみたいに真っ赤になった
それと同時、彼女は俺に鋭い拳を放ってきたのである
「あぶねっ！俺がじゃなくてお前が危ない！」
「ええーい！！向こう向け！！こっち見んなー！！」
「悪かったって！！悪かったから俺に触れようとすんなお前が怪我する！！」
こうして
他に誰もいない島で3歳の子供2人が騒ぐというなんとも不思議な光景があった
ここが、俺の新しい人生の始まり

第2話　修行

うん、危ないから反射切ろうと思ったらできたよ
というわけで白髪の女の子みたいな少年です、名前はまだない
今彼女は悪魔の実の能力で半人半虎になっている
だから女性としての大事な部分はしっかり隠されている、白い毛で色々と不味い気もするが彼女は服を持ってないらしい、そもそも何でこんな子供がこんなところに？
と聞いてみると「気がついたらここにいた」らしい
これを聞いた瞬間に嫌な予感がした
だってね？俺も気がついたらここにいたんだよ？
だとしたら、彼女も転生者なのではないか？
「もしかして、お前も転生者？」
「お前もってことはアンタも？」
どうやら彼女は転生者なみたいだ
決めた、俺はこの島を転生の島と呼ぼう
「はぁー・・・アンタもねぇ・・・でもびっくりするわよね。いきなり山に放り出されるんだから」
え？山？
今山って言いました？
「ここ、山なの？」
「そうよ、山。木登ってみなさいよ、下に村が見えるから」
俺は言われた通りに木を、登らなかった
だってベクトル操作で飛べるんだもん、登る必要がない
俺は爆発的な勢いで飛んで、周りを見渡す
すると下の方に村があった、ふむ、ここは転生の山か
俺は地面に安全に着地して
「取り敢えず下りてみるか？えーっと・・・」
「そういや名前、無いわね」

うーん・・・名前、ねぇ
「じゃあ前世の名前で、私はリナ、アンタは？」
前世の名前・・・だと？
正直嫌だ、だってダサい、小学生辺りになんだ俺の名前だせぇみたいなこと思ったもん
言いたくない・・・でも今すぐ名前考えろって言われたって・・・
・・・よし、正直に言おう
「・・・ライト」
「っしゃライト、行くわよ！」
ありゃスルー？スルーなのね？別にいいざますよ
こうして俺と彼女・・・リナは山を下りていった

・・・なんてこった
原作知識はあんまりないけど、確かにここはルフィの故郷
フーシャ村だ
「・・・フーシャ村かー」
「何？アンタここ知ってんの？」
「ん？お前ＯＮＥＰＩＥＣＥ知らねぇのか？」
「知らない、ここに来る前に何かのアニメの世界って聞かされただけ」
ふむ、知らないのか
だとしたら悪魔の実を食べた瞬間びっくりしただろうなー
だってこの世界のこと知らないんだから、クソ不味いモン食って虎に変身できたんだから
取り敢えず村長さん・・・てかルフィ探そう
いや、ここは・・・会っていいのだろうか？
俺はここにいてもつまらないから海に出るつもりだし、山にこもって修行の方がいいのではないか？
それに・・・その・・・能力暴走しちゃったら何だし、しっかり実力つけてから村に下りるか

「リナ」
「？」
可愛らしく小首を傾げ俺の方を見てくる
「俺は山に戻る。リナはどうする？」
「何で！？」
俺はさっき思ったことを説明した
あれ？俺なんかヘタレみたいになってる、いや俺はヘタレか
話し終えるとリナは少し考えてから
「・・・私もついてく、1人じゃ心細いし」
ありゃ、結構可愛いとこあんじゃん
俺は少し笑ってありがとう、と言っておいた
折角目の前に安全に過ごせる環境があるにも関わらず俺達は再び山に入っていった

とはいっても
ベクトル操作なんてものは結構簡単だったりした
ベクトルの計算式なんて必要なく、ただ『地面にヒビを入れる』とイメージするだけで勝手に能力が働く
高電離気体、プラズマもそうだ
プラズマってのは超高温の気体では原子核と電子の結合が維持できなくなり、原子が陽イオンと電子に分解してしまうそれによって生じた電子と陽イオンからなる気体をプラズマってんだけど、『プラズマを作る』ってイメージしたら出来た
その際、もの凄い暴風が吹き荒れたけど気にしない
風も手に取るように操れるんだからこの能力チートすぎる
地震も起こせたりしちゃうもの、凄いよこれ
「ライトの能力って本当に滅茶苦茶よね。同じ悪魔の実の能力者なのに私のが霞んで見えちゃう」
「鍛えようによってはリナも強くなるだろ。俺のは元々がチート過ぎるだけだ」

今思ったけどムキムキの実って超人系(パラミシア)？リナのはネコネコの実モデル虎みたいな動物系(ゾオン)だろうし、俺のは自然系(ロギア)じゃないよな？
だとしたら超人系(パラミシア)だな、決定
でも確か反射には弱点があったよな、確か反射膜に触れた瞬間拳を引いて、ベクトルを逆転させるみたいな・・・
後それと関係なく強すぎる攻撃は反射しきれなかったり
・・・まあ考えても仕方ない
「そういやリナって海に出る気あるか？」
「海？あー、さっき聞いた話じゃ今って大海賊時代なんだっけ？」
3歳の子供が何話してんだって思ってるだろうけど、気にしないで
「俺は海に出ようと思ってる、んで海賊王とは行かなくても世界に名を轟かせるような海賊になりたい」
「・・・で、私にどうしろって？」
察し悪い、何で？分からない？
「だから、海に出る時着いてきて欲しい」
そうだよ、着いてきて欲しいんだよ
ここで会ったのも同じ転生者なのも安心できるし、俺としては最初の仲間として申し分ない
ルフィは海賊王になる！！とか言ってたけど、俺は別にそこまで目指してない
海賊王なんざ自分から死ににいってるようなモンだ、だったら海賊王は目指さなくていい
「・・・んー、どうしよっかなー」
「分かった、なら後4年、俺達が7歳になる時に村に降りる、そん時に答えを聞かせてくれ」
「何そのプロポーズみたいなの、まあいいわ、OK」
4年後
そう、確かルフィが7歳の時に原作は始まったはずだ
あの神様からルフィと近い歳にしといたって聞いたし、俺達も7歳になったら村に降りればいい

それまで修行だ

第3話　遭遇

さて、と
問題が起きた
住居は問題なかった、俺の能力があればそこら辺の木を切って建てれる、簡単だ
問題は寝る時
当然毛布なんてものは持ってないので、４年間冷え込む時もあるだろう
寒さで死んじゃう
・・・なんてことも問題ない、俺の能力は冷気も反射できた
だったら何が問題かって？そりゃあ・・・
食べ物
こんな山なら動物の一匹や二匹はいるだろうと思ったが、生憎俺は調理の仕方なんて知らない
ただ肉を焼けばいいんじゃね？とか思う人もいるだろうが、何しろ野生の動物は危険がいっぱい
そしてこの世界のことだ、知らず知らずの内に毒を食ってましたなんてことは有り得る
俺達の目の前には焼かれた動物の肉、腹が減ってる今もの凄く食欲をそそるものだが・・・
「さて、どうする？」
と、俺がリナの方を見ると
虎さんがいた
そしてそのまま焼かれた肉にがぶり・・・と
「虎になった意味あんの？」
一言
なぜ虎になった、と問うと
「気持ち？」

だとよ
様子からするとこの肉は食べても大丈夫そうだ
何？最初から食っときゃよかったんだって？俺はヘタレなんだよ
～肉食し中～
「いや、３歳にこの量はきつい・・・」
「流石にね、それにしてもライト、食べすぎでしょ？」
そうだ、リナが5分の1食べたとしたら、俺は5分の４
流石に食べ過ぎたか、明日も明後日もいらないような気がする
ちなみに今は夜、リナは肌寒さを感じるのだろうか？俺は冷気を反射、熱気をも反射してるから分からない
そんで今何月？暑いか寒いかもわからん
とかこれから４年間過ごす家の中で考えてるんだが、寝ながら
・・・あー、
それよりもすぐ隣でリナが寝ているのが気になる
前も言った気がするが俺は精神年齢高校生、なはず
それか精神年齢3歳かもしれない、だとしたら俺はロリコンじゃない、希望はある
海についてきてくれるとしたらリナも当然成長するし、その時に俺が恥じらいを持っていたら完璧にロリコンじゃない！！
・・・なんで俺は自分のロリコン疑惑を解消させようとしてるんだ・・・
「寝よ」
俺は静かに目を閉じて眠りに落ちるのだった

４年後
おい作者、大したイベントがなかったからってすぐに４年経ったことにするな
・・・ま、それは置いといて
「何か名残惜しいわねー」
俺達の目の前には４年間過ごした家がある

「そうだな・・・思えばここが新しい人生の始まりだったんだし・・・」
でも仕方ない、村に降りるしかない
「行くか」
それだけ言うと俺達は村に降りていった

さて、どういうことだろうか
確か原作ではフーシャ村にシャンクスは1年間くらいいたんだよなだとしたらルフィが6歳の時にシャンクスが来たことになる
・・・ふむ、ならば
俺達はルフィより一個年上ということか
説明しよう！俺達が村に降りると今シャンクスがフーシャ村に着いたばかりなのである！
「取り敢えずあそこまで行くか」
「悪い海賊じゃないのよね？」
首を縦に振って肯定すると、リナは後ろをついてきた
・・・それにしても
7歳になるだけで大分可愛くなってる、いやまじで
髪は切ることがなかったから自然と肩の辺りまで伸びていて、風呂にも入って体のケアはちゃんとしてたから金色の髪が艶やかに光っている
可愛いというより綺麗、かな？
絶対将来美人になるｎ
ゲフンゲフン
何か俺危ない方向に進んでる気がする
俺と言えば、肩より少し上まで伸びた白い髪に、可愛かった顔には少しずつ男の面影が見えてきたところだ
でも現段階ではまだ女の子と間違えられるだろう、リナに間違えられたように
・・・まだ港の方にいるな、ルフィらしき子供もいたけど、スルー

先にマキノさんに会いに行く
すぐに酒場にくるだろうし、マキノさんのところに行っといたら自然と会えるだろう
俺達が酒場に入ると、マキノさんしかいなかった
そりゃな、今お昼だし、いやでもここなら昼にきててもおかしくないか？
だとすると、海賊を見に行ってたり・・・
考えてもしゃーない
「あら、見ない子ね。どこからきたの？」
リナの方をチラッと見る
・・・金色の瞳が語っている、任せた、と
リナから視線をはずしてマキノさんの方を再び見て
「山からです」
言った
マキノさんからした俺達の第1印象、変な子達
あれ、悲しい、何かもの凄く悲しいぞ
「・・・細かいことは気にしないでください、ていうか聞かないで、俺達が変な子になっちゃう」
俺が勝手にしょんぼりしながら言うと
「ライトに任せた私が馬鹿だった・・・私の名前はリナ、こっちはライト、しばらくこの村にいる予定だからよろしく」
最初からリナがやってくれたらよかったのに、俺が滅茶苦茶馬鹿なヤツみたいになったじゃねぇか
実際馬鹿だけど
「え？ああ、私はマキノ、よろしく」
マキノさんは笑顔で言ってくださった、それが作り笑いだとしてもの凄く嬉しい
・・・ハッ！！
そうだ忘れてた
「俺達住む場所がないんですよ。だからできればここで働かせても

らいたいんですが・・・」
ここで生じるのが子供に任せることの心配、どうせ酒瓶を割るなんて思ってるんだろう
そんなモンあるわけない、ベクトル操作してりゃ落とすことなんざまずないんだから
「でもねぇ・・・」
「掃除とかなら滅茶苦茶自信あります、塵一つ残しません」
俺がキリッとした（実際キリッとしてるかは分からない）表情で言うと
バン！！と後ろの扉が開いた
そう、かの赤髪のシャンクスである
・・・俺達が7歳だからか、異常にでかく見える
そしてその隣にはちっちゃい男の子、モンキー・D・ルフィがいた
「ん？誰だ？お前等？」
ルフィが最初に口を開いた、そりゃそうだ、見知らぬ顔が二つもあるんだから
「何だ？このお嬢ちゃん達、友達じゃないのか？」
ピクッ
な、何？この赤髪さん、何て言いやがりました？
リナは必死に笑いをこらえている、ち、チクショウ
「・・・ちょっと、そこの赤髪が素敵なお兄さん」
「？」
分かってる、俺が悪いんだ、こんな顔立ちだから
でもさ、流石に怒っちゃう、俺って男の子だもん
「・・・俺、男です」
シャンクスから見た俺の第1印象
女の子

第4話　山賊

1年後
俺達はマキノさんのところで働いている
もちろんルフィみたいに航海に連れて行ってくれ、とかは言わなくてせっせと働いているだけだ
お金も貰ってる、これは当たり前
俺のベクトル操作があったら酒を運ぶのも余裕、掃除も余裕、色々と便利なのだ
でも本当は滅茶苦茶強いのに平和的な使い方しかしてないってどうよ
ああ・・・山にいたころが懐かしい
なんてリナに話してみると「戦闘狂」と言われてしまった
いや・・・そういうことじゃないのよ、決して
とはいえ一年後、俺達は8歳でルフィは7歳
そうだ、少なくとも今年中には原作が始まる
てかもう・・・
「始まってるんだけどね」
酒場に広がる喧騒の中、ポツリと呟いた
ルフィが目の下にナイフを突き刺した、と実際に聞いたら寒気がしたいやだって、漫画で読む限りは平気だったけど、実際にルフィと友達になってみたら・・・
そりゃびっくりする
とりあえず酒を全部運び終えて一息をついてるところ
だったらよかったのに、シャンクスとルフィの隣だから落ち着けやしない
「お前なんかが海賊になれるか！！カナヅチは海賊にとって致命的だぜ！！」
というシャンクスの声が聞こえてくる
・・・ええ、俺はカナヅチですよ、悪魔の実の能力者ですよ

クソッタレ、自分に向けての言葉じゃないとしても腹が立つ
「ちゃんと鍛えてるから、俺のパンチは銃(ピストル)のように強いんだ！！」
ああそう、でも俺には効かないよ
あ、ルフィが拗ねてどっか行った
「シャンクスー、ルフィいじんのも大概にしてやれよ？」
「何だライト？相手にされないから拗ねてんのか？」
「もうテメェに酒ださねぇぞ」
直後にごめんなさい、とシャンクスから謝罪の言葉が述べられた
「ったく、ルフィを航海に連れてってやれとは言わねぇけど、今回みたいに大怪我されちゃ敵わねぇ」
誰に聞かせるわけでもなく一人呟いていると、どっかに行ってたルフィから
「ライトも一緒に行こうぜ！！海！！」
「俺は後9年か10年したら海に出る、それまで金集めだ」
「じゃあ俺と一緒に海賊になろう！！」
「拒否する」
ルフィなんかに着いていったら命がいくつあっても足りやしねぇ
俺はカウンターに突っ伏して、横でぎゃーぎゃー騒いでるルフィを無視しながら眠りにつこうとすると
バン！！という木の板が割れる音がした
眠気が吹っ飛び音のした方向を向くと
「邪魔するぜェ」
あ
8年経ってるからこいつ等くるの忘れてた
扉を蹴破った山賊がカウンターまで来て、マキノさんと何か話している
まあ俺が何かされるわけでもないし、無視しとくか・・・
男から目線を外し、また眠りにつこうとすると
バリィン！！
「あ？」

反射的に声が出てしまったが聞かれてないのでおっけー
床を見ると、ビンが割れて酒がこぼれていた
次にシャンクスに目を向けると、頭から酒をかぶったみたいで、ずぶぬれになっている
ふむ・・・
こいつ等、どう料理してやろうか
などと物騒なことを考えていると、男が持っていた剣が振り回された
「ちょ、あぶねっ！！」
カウンターの席に座っていた俺は剣で切られそうになって、咄嗟に床に転がった
ちなみに反射は切ってる、だって反射やってたらろくに人にも触れれない
「じゃあな、腰ヌケ共」
という山賊の声が聞こえた、俺の心は死ぬかと思ったというドキドキ感でいっぱいである
「・・・あーちくしょう、リナーさっさと片付けるぞ」
「言われなくても」
ちょっと濡れたけどそれは後回し、床に転がっているビンを拾って酒を拭いていると
「っだーっはっはっは何てざまだお頭！！」
シャンクス達が一斉に笑い出した
ちょっと待て、俺は笑えない、死に掛けたもん
こんなことならカウンター席座ってなけりゃよかった
「なんで笑ってんだよ！！」
「うおっ、びっくりした！」
「ライト、アンタ・・・」
リナから呆れたような目で見られる、仕方ないじゃないか、いきなり大声出すんだもん
「あんなのかっこ悪いじゃないか！！なんで戦わないんだよ！！いくらあいつ等が大勢で強そうでも！あんな事されて笑ってるなんて

男じゃないぞ！！海賊じゃないっ！！」
「いや、ここで戦われたら従業員の俺が困る。かなりマジで」
「ぷっ」
俺のＫＹ発言に吹いた人物が１人、リナである
「おいまてよルフィ・・・」
「もう知らん！！弱虫がうつる！！」
怒って去っていこうとしたルフィの腕をシャンクスが掴むと
ルフィの腕が伸びた
これは流石に覚えてた、リナには言ってないからびっくりしてるけど
この酒場で落ち着いてるヤツが１人、俺である
皆が驚いている中、１人で黙々と掃除をする俺であった

「配達終了、っと」
「結構な量配達したから疲れた・・・」
配達を終えた俺達は酒場へと帰っていく
隣ではリナが肩を落として疲れました、と目一杯体で表現している
・・・俺は地味に能力つかってたから疲れないわけだけども
全然痛んでない足を動かしつつ、酒場に向かっていると
「・・・あれ、何？」
酒場の前に人だかりが出来ていた
いや、何か子供が持ち上げられてるな・・・しかもあの後姿どっかで・・・
思い出した
「ルフィと山賊、だよな・・・」
「どうすんの？穏やかじゃないみたいだけど」
見る限りルフィがボコられてんのか？
なるほど
「久々に暴れてくる、手ェ出すなよ」
「了解」
反射設定、完了

足の裏のベクトルを操作して一気に山賊との間をつめる
「何だこのガキ！？」
いきなり現れた俺に戸惑う山賊、その隙に腹に一発
「はーい、クソ野郎共。この俺がぶっ飛ばしにきてやったから感謝しろよ」
「誰かと思えばあの時酒場にいた嬢ちゃんか・・・今なら殺さねぇでおいてやるからどっか行け」
「思ったより優しいんだな・・・でも、ルフィに手を出した時点でアウト、テメェ等全員でかかってこい。一瞬で終わらしてやる」
嬢ちゃん、とな？
ＯＫ、こいつ等よっぽど死にたいとみた
山賊が周りから一斉に襲い掛かってくる、でも俺は動かなくていい
攻撃してこようが俺には反射があるからな
「何だコイツ！？攻撃がはじかれ・・・ッ！？」
「うぎゃあああああ！！指がぁあああ！！！」
「うっせェ」
俺は腕を横に振った
その動作だけで山賊が吹き飛んで、俺の周りには一切山賊がいなくなる
「さて、後はお前だけだ」
「クソッ！！」
煙幕
「意味ねぇっての」
また腕を振る、すると山賊の唯一の逃げ道の煙幕が完璧に晴れた
「なっ・・・！？」
「お前は踏み台にもならなかったな」
忌々しいクソみたいな山賊の顔面に
俺の拳が突き刺さった

第5話

「いやー、ライトって能力者だったのか！」
俺は今、シャンクス達に囲まれている
山賊との一件で俺が能力者だということがバレてしまったのだ
そりゃこの海じゃ能力者は珍しい、特に俺みたいなチートみたいなやつは
どんな能力なんだ？と聞かれたからベクトル操作、と答えてやった
想像通り頭の上に？が浮かんでいる、おばかちゃんには分からないのですよー
・・・さて、この山賊の件が終わったからもうすぐシャンクス達がこの村を出るはずだ
参ったなー、いい客がどっか行っちまうなんて
・・・小さい船買って近くの町にでも行くか？
やめとこう、素直にここで働くしかないよな
とか言いながら俺は密かに船を買おうと考えている、思ったよりバイト代がよかったから大きい船買えるんじゃないか？
まあまだ働かなきゃいけないけど
周りで騒がしく暴れている中、俺は仕事を始めるのであった

ついにこの時がやってきた
いい客が・・・シャンクス達がこの町から出て行くらしい
シャンクスが俺を勧誘してきたけど丁寧に断っておいた、その時にルフィが五月蝿かったのはいうまでもない
「おれはいつかこの一味にも負けない仲間を集めて！！世界一の財宝を見つけて！！」
ルフィがぎゃーぎゃー言っている、いいねぇ、若いってのは
「海賊王になってやる！！」
滅茶苦茶若いわコイツ

じゃあまずは俺を倒せるようにならないとな、それがいつになるか分からんが
「ほう！！俺達を超えるのか・・・じゃあ」
シャンクスは自分のかぶっている麦わら帽子を取って
「この帽子をお前に預ける」
ルフィにかぶせた
何この人イケメン、尊敬する人物第1位かもしれん
「いつかきっと返しにこい、立派な海賊になってな」
シャンクスは俺達に背を向けて船へと歩いていった
おっと、ルフィだけに宣言させてたまるか！！
「シャンクス！！次会うときは海の上でな！！」
「ああライト、お前が俺達に追いつけるのか？」
シャンクスが振り返って、俺に笑いかける
隣にいるリナを一度見て、俺は
「リナと一緒に頼もしい仲間見つけて、シャンクスに負けねぇ船長になって会いに行く！！」
「リナ、いいのか？ライトはこんなこと言ってるけど」
愉快そうに笑いながらシャンクスがリナに言う
「ま、覚悟してなさいってことよ」
「・・・ああ、俺をがっかりさせんなよ！！」
シャンクスは再び俺達に背を向けて船へと向かった
・・・さてと
まずは金集め、かな
そして、次の舞台はここから9年後

「しっかしでっけぇよなー」
俺とリナの前にはメリー号並の大きさの船がある
結局俺は10歳になると小さな船を購入し、色んな町に働きに出かけていた
今日は記念すべき船出の日、港には皆が見送りにきてくれている

「でも、こんな大きな船2人で足りるの？」
「俺のベクトル操作があれば関係ねぇだろ」
俺とリナは船に乗り込んだ
「ライトー！また海でなー！！」
「ああ、ルフィ！俺があまりに強すぎてお前が霞んじまうかもなぁ！！」
「なんだと！？じゃあ今ここで戦ってみるか！？」
ルフィから思いにもよらない言葉が、上等
「リナ、悪い」
「はぁ・・・すぐ終わらせてね」
何かルフィに対して失礼だぞ、まあ今はすげぇ差が出来てるんだけども
俺は船から降りて、ルフィから距離をとる
リナがポケットからコインを取り出して、上に弾いた
あのコインが落ちた瞬間試合開始だ
静寂した空間の中、小さな金属音が鳴り響く
瞬間
「ゴムゴムの銃（ピストル）！！」
ルフィの右腕が伸びて俺目掛けて放たれた
銃（ピストル）の名を語るに恥じない威力ではある、だが
威力が強ければ強いほど反射の勢いが強くなる
「ッ、いってぇ！！」
ルフィの拳は俺の反射膜に触れた瞬間、勢いよく弾かれた
「俺に触れることも出来た事がねぇのに、よく戦おうなんて言えたな？」
「うっせぇ！ゴムゴムの鞭！！」
ルフィの足が伸びて、俺をなぎ払おうと横から迫ってくる
だが問題ない、俺が何もしなくても自然と反射膜に触れて弾かれる
その瞬間、ルフィの体勢が崩れ大きな隙ができた
足の裏の運動量のベクトル、脚の運動量のベクトルを操作して一気

にルフィとの距離をつめる
まさしく砲弾のような速度で
そのままの勢いで右手で拳を作り、ルフィの顔面に放つ
勢いよく吹っ飛び、数m転がったあと、大の字で仰向けになって倒れた
「で、満足したか？」
倒れたルフィに、俺が余裕の混じった声で言うと
「・・・次会った時は、負けねぇ！！」
「上等、俺を超えてみろよ。一生かかっても無理だろうがな」
倒れたままのルフィに背を向けて、船に乗り込んだ
「あれで手加減してるんだもん、本当に滅茶苦茶よね、ライトって」
「誉め言葉だよな？それ」
リナに呆れたようにため息を吐かれた、なんだよ
「それじゃ、出航！またなルフィ！俺を倒せねぇようじゃ、シャンクスに会うのはまだまだかもなぁ！」
「うるせぇ！！次会った時には絶対戦いやがれ！！」
弟みたいなヤツから決闘を申し込まれた、いいぜ、相手になろう
俺は皆が見えなくなるまで手を振り続けた

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8883z/

ONEPIECE~白髪の男~

2012年1月14日01時03分発行